

活動ピックアップ!

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

小国地域 Eguni 特定非営利活動法人 Kiss
地域のリビングルーム、小国に完成



広告、IT、建築の専門家など20名余のメンバーで、非営利団体に対する広報・IT支援などを行っています。以前の拠点・東京都吉祥寺ではコミュニティカフェを運営。イベントや講座も行う中で、子どもからお年寄りまでが集う街のリビングルームのような場となりました。2021年小国に新設した多目的施設「Kirisawa Base」でも同様に、地域や世代を超えた交流を推し進めていきたいです。

2 地域をゼロに ソリマチグループ
会計でみんなを幸せに



中小企業や農家に向けて会計ソフトの販売や会計事務所業務、経営コンサルティングなどを行っています。「農業王 アグリエーションアワード2022」では、会計ビッグデータを基に、優良経営を実践している農業者を表彰し、その特徴を広く発信することで農業の活性化を支援しています。今後は日本の食料自給率を高めるためにも、表彰制度を通じてSDGs農業の考え方を広めていきたいです。

市民活動 虎の巻



「解説動画」はこちら!

研究テーマ

寄付につなげる!
～寄付してもらいやすい状況をたくさんつくろう編～

毎年12月は寄付月間。「欲しい未来へ、寄付を贈ろう。」を合言葉に全国規模で行われる啓発キャンペーンです。一人ひとりがこの機会に寄付について考え、実践することに加え、寄付を受ける側が寄付者に感謝して、きちんと寄付の使い道を報告するきっかけにしようという取り組みです。そこで今月から3号に渡り「寄付につなげる」を徹底研究!第1回は寄付しやすい機会のつくり方をご紹介します。

その1

イベント会場には寄付BOXを置く

みなさんの団体で企画したイベントや講座に参加してくれた人は、すでにあなたの活動に興味を持ってきている人です。寄付BOXを用意して、イベント終了後に、今日の感想を聞きながら会場を回ってみましょう。これからの活動を応援してくれる可能性があります。

その2

会費には松竹梅の選択肢を設けてみよう

会費の金額設定は悩むもの。人には無難なものを選びたいという心理があるので、思い切った3段階の金額を設定してはいかがでしょうか。「たくさん寄付して活動のチカラになりたい」「応援したいけど、今は余裕がない」など様々な支援者のニーズに応えられる選択肢を用意することが会費収入につながるかもしれません。

その3

参加者に合わせた参加費を用意してみよう

申込時に参加者が気軽に寄付できる「寄付つきチケット」を用意してみましょう。有料イベントで「寄付つきチケット」を販売する場合には、購入者特典をつけることもおすすめ。また参加はできないけれど応援したい方向けには「応援チケット」を用意し、寄付してもらいやすいような工夫をしましょう。

センターからのお知らせ

活動紹介・作品展示におススメ! 協働センターの壁面展示

協働センターのロビーには無料で利用できる非営利団体の活動発表用の展示スペースがあります。使い方はいろいろ! 展示用備品のレンタルもできます。サークルの作品展示や、活動紹介などにいかがですか?

展示期間 2週間以内

展示スペース

- 正面壁:幅5m80cm×高さ1m70cm
- 協働ルーム脇壁:幅6m50cm×高さ2m50cm
- BCホール脇壁:幅6m×高さ1m75cm
- 第3協働ルームガラス面

利用申込
協働センター窓口または電話でお申込みください。
・展示予定日の6カ月前より予約受付
・個人の利用はできません

発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザオーレ長岡 西棟3F
Tel. 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakyodo.net



配布場所 長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。



知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

2022
12
vol. 120
Take Free



帰ってきた! 市民活動の文化祭

特集
帰ってきた! 市民活動の文化祭

NAGAOKA PLAYERS

片野 大輔さん

活動ピックアップ
特定非営利活動法人 Kiss

長岡みんなのSDGs
ソリマチグループ



ながおか市民協働センター

帰ってきた！市民活動の文化祭

～ウイルス禍での開催を通して見えたものと、これから～

2022年10月8日、新型コロナウイルス感染症の流行により対面開催の中止を余儀なくされていた「ながおか市民活動フェスタ（以下、市民活動フェスタ）」が、3年ぶりにアオーレ長岡で開催されました。市民活動フェスタは、市民活動団体が日頃の活動をPRする出会いと交流の場。2006年から大手通歩行者天国で行われていた「市民活動まつり」が、アオーレ長岡がオープンした2012年に「ながおか市民活動フェスタ」と名前を変え、アオーレ長岡を会場にして行われるようになりました。以来、市民の方に活動の楽しさを伝える「市民活動の文化祭」として多くの方に親しまれています。

ジャンルを超えた “ごちゃまぜ”な場所

市民活動フェスタの大きな特徴の一つは、ジャンルや世代、地域を超えて様々な団体が集まる“ごちゃまぜ”なイベントであること。当日は地域づくりや子育て、社会福祉、文化芸術など様々な分野で活動している団体が集まり、ステージ発表やブース出店で日頃の活動をアピールします。その内容は、フルバンドのオーケストラに股旅舞踊、ロボコン体験に外国人市民による母国紹介と、実にバラエティ豊かです。

この多様性により、ご来場される市民の方は、「何だか楽しそう」と立ち寄った場所で知らなかった様々な活動と出会うことができます。楽しくかたを体験していたら、知らないうちに長岡の歴史について学んでいた。お昼ご飯を買いに行ったブースで、障がい者支援の活動をしている団体に会ったり。実際に、今年度の来場者からは「様々な団体の活動を知ることができて楽しかった」「市民活動はなかなか知る機会がないので、知ることができてよかった」「長岡の皆さんの取り組みがすばらし

い」という声をいただいています。

一方、多くの団体が一堂に会する市民活動フェスタだからこそイベント参加へのハードルが下がるという一面もあります。市民活動フェスタは、アオーレ長岡という大きな会場で多くの市民の方を前に日頃の活動をPRできる場所。「自分たちだけでと集客が難しい。文化祭のように、他の団体がいるからこそ、参加しやすいという声を参加団体から聞きます」と、副実行委員長・荒井ゆみさん。また参加するとなると準備が必要になり、その過程が参加団体への刺激になっているという一面も。副実行委員長・田村京子さんは「参加するには、ちょっとした勇気と元気、やる気が必要。これらが市民



市民活動フェスタを通して出会った、オンザロックオーケストラとappyさんがコラボレーションステージを披露。

活動団体のカンフル剤になっているのではないのでしょうか」と言います。

対話と作業でつながりをつくる

しかし、異なる分野の団体が集まれば集まるほど、価値観や意見の違いによりイベントの運営は難しくなってしまうがち。そこで市民活動フェスタでは、対話や作業を通じて参加団体同士がつながる機会を大切にしています。例えば、その年の参加団体全員が顔を合わせる全体会議や、ナカドマやアリーナなどエリアごとに集まり、イベントを盛り上げる企画を行う町内会制度。「様々な課題を克服するために、み



前日準備で集まった、参加団体の皆さん。備品の取り扱い方を聞き、レイアウトに沿って椅子やパネルを設置しました。

んなが対話を重ねて議論する。その合意形成のプロセスこそが、団体の皆さん、ひいては長岡市のコミュニティ全体にとって大きな財産になるのではないのでしょうか」と、実行委員長・海津裕之さんは言います。また前日の備品搬入、イベント後の搬出や片付けも、参加団体全員で実施。「次は、何をやる?」「これは、どうやるんだろう?」と、一緒に作業をするからこそ会話が生まれ、普段顔を合わせることがない人たちの交流につながります。

ウイルス禍で失ったもの

2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行により、多くの市民活動団体が活動の機会や場を失いました。ご自身も団体の一員として活動している海津さんは、当時の状況について「事実上の休眠状態だったと言えます。この期間に失った、一番大きなものは自分たちの中にある『やる気』だったのかもしれない」と話します。市民活動フェスタも、感染防止の観点から対面開催の中止を余儀なくされ、2020年度は活動動画の作成、2021年度は活動PR展示を行いました。

今回の開催で得た手応え

感染症流行後、初の対面開催となった今年度は、参加団体数が31になり規模は縮小したものの、2,000人の方が来場。ステージ発表の運営をしていた田村さんは「印象的だったのは、ステージから下りてくる参加団体の皆さんのうれしそうなお表情。やはり、みんな表現する場所や貢献できる場所を求めているんだと思いました」と当日を振り返ります。今回の開催を通して、失ったものの全ては取り戻せなかったけれど、掴んだのは確かな手応え。「不完全な状態であったとしても、工夫次第でできるこ

とはたくさんある」と、荒井さん。また海津さんは「気づいたのは、新しいアイデアを創出する上で、人と直接会ってコミュニケーションをとることが、いかに大切かということ」と、対面開催ならではの良さを再確認したと言います。

社会的処方 プラットフォームとして

ウイルス禍で広がった人々の孤独や孤立を癒す手段のひとつとして、注目されている市民活動。薬を処方するのではなく、人とのつながりを処方することで精神的な問題を解決する手法を「社会的処方」と言います。市民活動



今年度の市民活動フェスタの様子。体験ブースや飲食販売など様々なブースが並び、来場者を楽しませていました。

フェスタは、市民の方が知らなかった活動と出会うプラットフォームとしての役割を担い、長岡の社会的処方の一助となっていくのではないのでしょうか。海津さんは言います。「市民活動には、これといった定義はありませんが、共通しているのは活動を通して喜びを感じ、情熱と誇りをもって取り組んでいること。そんな熱い人たちが中心となり、市民の方も一緒になって楽しみ、喜びと感動を共有できる場所、それが市民活動フェスタだと思います」。長岡に住む人たちが新たな活動に出会い、参加し、生きがいを見つめる。一人ひとりの小さな出会いが、大きなまちの元気をつくっていきます。



NAGAOKA ウワサのあの人にインタビュー! PLAYERS

片野 大輔 さん

48歳／演奏家・音楽講師／
アンサンブル・オビリー

1974年長岡市生まれ。音楽一家の元で育ち、幼少期からチェロを習う。



チェロが気づかせた、音楽で地域に関わること

プロのチェロ奏者である片野大輔さんは、新潟県内を中心に演奏会を精力的に開催。また、オーケストラや音楽教室、高校で指導に当たるなど、地域の音楽文化振興にも力を入れています。

高校卒業後、国内外の多くの音楽家に師事し、プロの演奏家を志していた片野さん。そんなある日、父親が急逝。独り身となった母を気遣い長岡へ帰ることを決めました。当時はチェロ一筋の生活を

していたため、帰郷後しばらくはそれまでの経験を役立てられるような望みも持たず、不安な日々を過ごしていました。

その時に声をかけてくれたのは、亡き父の同級生の方々でした。自身も同じ高校に通っていたことも縁となり、地元オーケストラとの共演や大小さまざまな演奏会など、多くの機会を用意してくれたのです。

次第に演奏家としてだけでなく、講師

や事業の企画、演者や進行の調整役などの求めにも応じるようになり、音楽関連の分野でその力を幅広く発揮できるようになりました。「長岡のような地方都市では演奏家としてだけで生きていく事は容易ではありません。私は運良く色々な頼まれごとをいただき、それに何とか応えてきたことが、いつしか自分の強みとなっていったのかも知れません」。

特に今やりがいを感じているのが、子どもたちとの関わり。学校に出向き、プロの音楽家とのふれあいを通して音楽への関心を深め、感性を育む、普段の授業とは異なる体験の提供に力を

入れています。「無気力にも見えた彼らが、音を聴いたり楽器に触れた時に、ぱっと生き生きした表情に変わる瞬間を見ると、音楽には人の心に届く力があるのだと感じます」。

「チェロ奏者を志した当初の想いとは異なる道を歩んでいるかもしれません。しかし今では演奏だけでなく、異なる立場の方々と協働しあう中で地域の文化振興に関わっていることに誇りを感じています。将来を担う子どもたちには、音楽に限らず、自分が打ち込める何かを見つけて育ててほしいと願っています」。



本物の楽器と舞台上、本格的な音楽の体験をしてもらう取り組みも。